

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第465号 2020年12月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

子どもたちが輝く授業をつくるために

窪田 浩尚

10月に校内研で吉永先生に小学6年の「海のいのち」の授業を見ていただく機会がありました。

吉永先生とは前任校でも校内研で授業を見ていただいたご縁もあり、2回目でした。前回は子どもの実態を書いた長文の指導案を読んで、クラスの歴史がよくわかる指導案だとほめていただいたことを今でも覚えています。また、子どもたちの様子を写真に撮ってくださり、その様子を見たときに子どもたちがこんなに目を輝かせて授業に取り組んでいたのだということに気づくことができました。学校が変わり、子どもたちも違う中で、今回も吉永先生は子ども

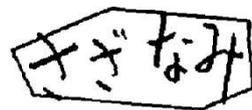
たちの様子を写真に収め、見せていただきました。鉛筆を持って真剣にノートを書く姿や、班での話し合いの時に思わずジェスチャーを交えて話している様子。全体交流で話しているときに周りの子がしっかりと発表者を向いている瞬間や、意見が言いたくて一生懸命に手を挙げている姿など、子どもたちが輝いている姿をたくさん見てとても感動しました。こんなに輝く瞬間がたくさんあったんだと改めて気づかされました。その「海のいのち」の授業では、中心人物の太一がクエにもりを打たなかった場面について学習をしました。授業が終わった後、授業

でなかなか発表できない子が私に「太一の夢が変わったということ」を言いたかった。」と話してくれ、黒板に大きくその意見を書いて赤で丸をつけました。吉永先生はその瞬間も写真に収めてくださり、その子とのエピソードを話すととても良い出来事だとほめてくださったことが私自身とても嬉しかったです。子どもが輝いている瞬間をたくさん発見される吉永先生にいつも励まされ、本当に素敵な先生だとも思っています。

「国語では教科書が二つあります。ひとつは教科書で、もうひとつは先生方の行動や言葉です。それが見本になります。」

以前研修で吉永先生がお話されていたことのひとつです。すごく印象に残る言葉で自分も意識して取り組もうとしています。ですがなかなかうまくいかないことが多いです。子どもたちが授業で輝けるようにするために私ができることはまだまだたくさんあるなと思います、明日の授業どうしようかなと考えていこうと思います。そして、まずは子どもたちの授業での小さながんばりをたくさん見つけていきたいです。

(東大阪市立枚岡東小学校)



▼緊急事態宣言による一斉休校下で始まった令和2年度も後半を迎えている。このことについて上床美嗣氏(東京家政大・武蔵野大講師)が「逆転」(vol. 61No2)

に「改めて学校・学級の役割を考えた」において次のように書いておられる。▼「学校・学級の役割」
 ①時程に沿った学習や生活は、「規則正しい生活をする自律を学ぶ場」である②何でもやってくれる家族はいないので、「自分のことは自分でやる自立を学ぶ場」である③仕事が忙しい大人や電化が進んだ家庭に代わって「基本的な生活習慣を学ぶ場」である④相対的貧困ということが問題になる時代において、「望ましい食習慣の在り方を学びながら、最低限の食は確保されている場」以下、「異年齢の付き合い方を学ぶ場・我慢することや学ぶ場・子ども達の居場所・自分の個性に気付く場」等、10項目を挙げておられる。これらの全て、納得できることばかり
 ▼「異年齢の付き合い方を学ぶ」においては学校行事において全校児童が集まって校長先生の話や聞くことや児童集会所がほとんどないまま、半年以上が過ぎる。このことが小学校1年生が「学校」を知るといふ体験と無関係ではない。6年もまた、高学年としての自覚の希薄さに繋がらないのだろうか▼地道な当たり前の日々の尊さを改めて考えている。(吉永幸司)

「人類の宝の 解説文を書こう」 箕浦 健司

「鳥獣戯画」を読む 「日本文化を発信しよう」(光村 六年) 本単元で設定した指導事項は、B書くこと ウ 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 である。高畑氏が「人類の宝」と評する「鳥獣戯画」とは、自分もその良さを解説する文を書いてみよう!と学習活動がスタート。まず、自身の書く活動に生かすため、教科書教材「鳥獣戯画を読む」で、筆者である高畑勲氏の文章表現の工夫を学ぶこととし、以下の学びを得た。

・見事である。・実におもしろい。・すばらしい。・いきいきしている。・動きがある。・気品がある。 解説文を描くための工夫を学んだ後は、自分が解説する場面を選んだ。まずは、その絵を中心に置いたワークシートに、①事実②自分の考え、評価を色別の付箋に書き込んで貼り付けた。次に、それをもとに下書きをして、友達同士で読み合い、よい点(青)と改善点(赤)の付箋を互いに貼り合わせた。以下は、子どもたちのアドバイス例。 「この絵を見てみよう。」など、絵に注目させる表現を入れた方がよいと思います。 「この場面の評価の言葉としては、気品がある。」などはどうですか。 「もちろんよい点も十分に伝え合おう。清書にうつった。鳥獣戯画」の一場面は、コピーではなく、濃淡二種類の墨で、細筆を使って自分で解説文を描くという絵について解説文を書くこと。ここで、学習意欲は俄然高まった。 「鹿いるかい。一頭三頭ですよ。」 「鹿が鹿を引き連れて、猿たちに商売をしている。そして猿たちは鹿が欲しいのか、一匹が手を伸ばしている。周りの猿たちも「鹿だ。鹿だ。」と興奮しているように見える。墨一色だけで描かれ、見事な筆遣いで動物たちを表現している。これは、平安時代に作られた『鳥獣人物戯画』の一場面である。ではまず、鹿に注目してみよう。 (中略) :猿の着物に注目すると、しわなど、すごく上手く表現されているね。見ただけで着物だと分かるのも、実にすばらしい。」 (長浜市立南郷里小学校)

人として 弓削 裕之

全校でルールについて考える授業に取り組んだ。5年生担任で教材研究をした際、授業をする上で大切にしたいことを話し合った。子どもたちがルールそのものについてどう考えているかを知ること、子ども達の発言に対して「その通りですね」などと返して正解を作ってしまうことの2点を共通理解して授業に臨んだ。 授業の始め、「ルールとは何ですか」と子どもたちに尋ねた。 「みんなが気持ちよくすごせるようなきまり」 「みんなが守らないといけないいきまり」 「みんなが共感する規則」 「多数の人が受け入れられるように作ったきまり」 「みんなが楽しく遊んだりできるようなきまり」

などの意見が出た。「みんな」 「多数の人」という言葉が光った。 次の、学校生活に絞り、どのようルールがあるかをみんなで考えた。廊下を走らない、人をたたいたりけつたりしない、持ち物に名前を書き、チャイムが鳴ったら座る、他人の物に触れない、「くさん」と呼ぶ、右側通行をする、授業中に立ち歩かない、丁寧な言葉遣いをする、給食の後片付けは静かにする、高額なお金を持ってこない、マスクをつける、給食中に話さない、などが発表された。黒板の端から端に①⑦までずらりと並んだルールを見た子どもたちは、「十七条

憲法だ」「聖徳太子だ」と盛り上がっていた。 「低学年に優しくする」ということをルールとして発表した子がいた。「学校が楽しい場所だと思えるように」という理由だった。 「あいさつをする」も、ルールとして発表された。理由は、「自分も相手も一日を気持ちよく過ごせるから」ということだった。「思いやり」の心を持つことというルールが発表され、理由について考える時、空気が変わるのを感じた。「ルールなのかな」という疑問の雰囲気があった。「ルールだと思ってる」と尋ねると、誰も手を挙げなかった。「どうしてルールではないのですか」と尋ねたら、みんな首を傾げていた。その時、ある子が、「当たり前だから。人だから」と言った。 今の学校に勤めて初めて高学年を担任した時、吉永先生から「人として大切なことを教えてあげてください」という言葉をいただいた。自分自身が子どもたちに届いていないと感じる時が何度もあったが、その度に「人として」という言葉を思い出し、言葉を選んだ。 私は黒板に「人として」と書き、赤チョークで囲いをした。子どもたちがルールについて考える時、必ず「自分以外の誰か」を意識していたことを認め、ルールを作った人も同じ思いだったろうと付け加えた。 ちなみに、十七番目に発表されたルールは、「三行日記を提出する」だった。理由は「先生が悲しむから」。授業が終わると、「十七番目!十七番目!」と慌てて日記を書いている子どもたちの姿が見られた。 (京都女子大学附属小学校)

「語彙指導の改善 充実 三上 昌男

「語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基礎となる言語能力の重要な要素である」ことから、新しい学習指導要領では、語彙を豊かにする指導の改善・充実が求められている。

語句の量を増すことに関しては、低学年で「身近なことを表す語句」を、中学年で「様子や行動、気持ちや性格を表す語句」を、高学年で「思考に関する語句」を増すように重点化されている。

今年度から使用されている教科書では、語彙・意味を題材とした言語学習単元の設定、「学習の手引き」等における言葉の学習内容の提示、巻末や脚注等における語句の説明・整理などに語彙指導が意図されている。

教科書の十分な活用とともに、日常生活や読書を通して語句を意識し、辞書や事典で調べる習慣を身に付けることで、確かに語彙量は増えていくと考えられる。

教科書の活用においては、取り立て指導だけでなく、理解教材や表現単元で語彙・語句に配慮した指導も大事にしたい。

場面をくまらべながら読み、感じたことをまとめよう『ちいちゃんのかげおくり』(三年・光村下巻)の学習では、第一場面と第四場面の二つのかけおくりの場面を読み比べる学習活動に取り組む。

第一場面の動作を表す言葉を見てみると、

「お父さんがつぶやきました」「お兄ちゃんがき返しました」「ちいちゃんもたずねました」「お父さんがせつめいしました」「お母さんが「言いました」「お母さんがちゅういしました」「ちいちゃんとお兄ちゃんが、やくそくしました」「お父さんが数えだしました」「お母さんの声もかさなりました」「ちいちゃんとお兄ちゃんも・数えだしました」「お兄ちゃんも・数えだしました」「お兄ちゃんも言いました」「お父さんが言いました」「お母さんが言いました」

というように、それぞれの会話文の様子や気持ちの違いが伝わるように使い分けられている。

このように、動作を表す言葉に着目することで、人物のしたことや気持ち、まわりの様子を豊かに想像する手掛かりを得ることになる。また、理解にとどまらず、表現の際に使う言葉を選び、適切に表現する力を向上させることにもつながっていく。

学習指導要領解説には、指導計画作成上の配慮事項として、「知識及び技能」の指導事項については、「思考力、判断力、表現力等」の指導を通して指導することを基本とするよう示されている。語彙に関する指導事項を「読むこと」や「書くこと」「話すこと・聞くこと」の学習と関連付けて指導する工夫に努めたい。

(滋賀県総合教育センター)

お手紙を書くことで

読みを振り返る わたしはおねえさん (光村図書2年)

蜂屋 正雄

2学期の物語教材である。「自分とくらべてかんそうを書こう」という学習課題が提示されている。弟や妹がいる児童はもちろん、そうでない児童にもその気持ちを想像させる力を持った文学作品であると感じている。今回は「すみれちゃんのお姉さんらしいところを見つけてよう」ということを学習課題として共有し、おねえさんらしいさを見つけてよと「すみれちゃんにお手紙を書こう」と呼びかけ、児童自身の読みの変化を表現させるとともに、発見を振り返るよう学習を計画した。

初発の感想

「一番多かったのが、「歌が作れるのがすごい!」それは子どもたちにとつて未知の世界であるのだらう。次に多かったのが、実際にお兄さんやお姉さんである児童の「妹のお世話は大変。」という意見。また、疑問で出てきたのは「どうして、「あはは」とわらったのかわ。」「どうして、ノートのぐちゃぐちゃの絵を消さなかったのか。」というもの。今回の教材の本質に迫る疑問であり、この疑問を探ることを学習の柱にできそうだと考えた。

場面分け

次に、物語文について、これまでどのように登場人物がいるのか。「はじめ」の場面ではその中でも主人公のことについて教えて

くれていること。などを確認し、このお話を場面分けしていくこととした。分け方は、時間と主人公の気持ち。まずは、時間で分けるように指示すると、10月の日曜日の朝のことが書かれた段落とそれまでの段落、そして、コスモスに水やりをするまでの段落と「ちよつとしたこと」が起きている段落で三つに分けることができた。その後、三つ目の場面をすみれちゃん、の気持ちの変化に沿って、三つの場面に分け、合計五つの場面に分けられることになった。また、場面の気持ちは変化していることに気が付いた。その後、どうして気持ちが変化したのかを学習の中で探りあった。

すみれちゃんへのお手紙

すみれちゃんのおねえさんらしいさを探しながら、1の場面に書かされていた理想のおねえさん像を見つけた後、2の場面のいるのを見えさんになるうとしていたのを見つけた後、4の場面の半分なきさうではんぶんおこりそうだった。気持ちと理由を考えた後、5の場面の消すのをやめた理由を考えたとつて、すみれちゃんにお手紙を書いた。お手紙というものが2年生の児童にはうれしくて、書きやすい様子であり、基本的には「その気持ちわかれるよ。」というお手紙となり、学習の振り返りとして自然な形で書き表せた。課題としては、お手紙にいつもでも歌のことを書き、妹はかわいいですか、というような本文には書かれていない質問を書く児童がおり、うまく指導ができなかったのが反省である。これからも、本文を根拠に登場人物の気持ちを想い、学習を自然な形で進めたい。

(草津市立矢倉小学校)

ひらがなをよむ
ひらがなをかく
西村嘉人

新一年生を迎えて4月にスタートするはずだった仲よし一組。コロナ禍のおかげで二か月遅れで新年度が始まった。
今年度は六年生と一年生の女子児童二名のメンバーである。
一年生のSちゃんは保育園との入学前の連絡会で、
・自分の名前のかなは読めるはずだが、キャラクターシールなどの方が、ロッカーやフックの場所を覚えやすい。
・お話の本をみんなと同じようにに広げたがるが、絵を見て自分でお話を作ってつぶやく。
・数は5までは数えられるが、物と数が一致するのは2まで。
・クラスの友だちとは仲よく遊べるし、明るい性格なので多くの子から好かれてる。
・運動が苦手で、走るのが驚くほど遅い
など、多くの課題を教えていた。いた。

書けるように家庭で教えてくださっていたのが唯一の違いであった。しかし、書いた名前の文字の線は弱々しく形も怪しげなものであった。また、書いた一文字一文字を別々に提示すると読めないというのが六月の実態であった。
文字言語の指導から始まるのが一年生。とは言うものの、これまでは、殆どの子が入学前に平仮名は読めて、自分の名前を含めて多くの平仮名が書けることから指導をスタートしてきた。
平仮名が読めない、文字にまだ関心を示さない子どもと向き合う初めての経験が始まった。
《一学期》
Sちゃんは、机に向かって鉛筆をもつ「べんきようがだいすき」と笑顔で話す。また、国語の教科書のお話を聞くのも大好き。「大きなかぶ」のお話も何度か聞くうちに、わたしの読みに声を重ねてくるようになった。耳で聞いて覚えるので、「うんことしよ」と覚え間違うところも少なくなかった。学習中もマスクを外せない影響もあるかもしれない。
平仮名を書く学習も交流学級の子どもたちが使っているプリントで少し遅れ気味に進めた。Sちゃんは、友だちと同じプリントで学習することで大満足だったが、練習した文字が読めるようにはならなかった。

《二学期》
変化は算数の学習で先に見えだした。十までの数が唱えられるだけでなく、実物と数と数字が一致するように進んできた。また、「合わせて」の意味が理解でき、「たし算」ができるようになった。
算数の学習の自信になり、Sちゃんも、さらに「べんきよう」が大好きになり、平仮名の学習に取り組み始めた。
手札大のカードに平仮名二文字の言葉を書いた「平仮名カード」を次々覚えだしたのである。はじめに覚えたのは「みみ」「め」「はな」「くち」「て」「あし」。次に覚えたのが「うま」。これは教室にあるお気に入りの玩具の名称。
毎日、国語の学習時間に自分で「平仮名カード」を読む時間を求めるようになった。「あし」と「うま」が読めるのに「うし」が読めなかったり、「かい」は読めるのに「いか」は読めなかったりする。Sちゃんの学びの構造はまだ私には分かっていない。毎日が私にとっても学びの日々である。
ずっと目の前においていた「平仮名五十音表」を最近手にするようになったSちゃん。五十音表を見ながら文字を読もうとするようになってきた。でも、「あいうえ、え、かき、き、えき！」の読みである。今後、どのように学び方が変化するか、楽しみが尽きない毎日である。
(彦根市立稲枝西小学校)

編集後記

▼十一月例会(第四百六十四回)は、滋賀県の教育施策「読み解く力」と国語科の授業について意見交換。話題提供は学習指導案を資料として吉永が行った。▼研究協議として問題提起の一つは、子どもが学習の「めあて(課題)」を持つことについての実践的工夫と成果や課題について。二つ目は「一人学び」について。三つ目は、ペア学習については、滋賀県の「読み解く力イメー」では「主に文章や図、グラフから読み解き理解する力」についてである。三つ目については、「主に、他者とのやりとりから読み解き理解をする力」に関わる内容である。▼協議の資料として、「ごんぎつね(4年)」と「海の命(6年)」実践。「ごんぎつね」の実践は、学習の成果をポップにすると見通しを持って学習を進めた授業。「海の命」は、学習の最初の段階で持った感想の交流を大事にし、全体学習の課題を決めという形態。単元目標をめざして学習の進め方が違うように見える二つの実践について、学習指導案をもとに中心となる言語活動や教師の関わり方を考え協議を深めた。▼協議の過程で、明らかにしたのは、ペアやグループで考える時間が多という授業の中で、教師の役割。考える手がかりは、場の設定、話し方の工夫を超えるものというのである。
▼巻頭には、窪田浩尚先生から玉稿を頂きました。深謝。
(吉永幸司)